

三つの三十三間堂

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



発掘された尊勝寺阿弥陀堂の跡（西から）写真中央の幅の広い部分が母屋にあたる。

平安京を中心として栄えてきた京都では、平安時代の終わり頃（11世紀後半～12世紀）には、鴨川の東にある白河や洛東、また、洛南にある鳥羽離宮などが新しく院政（上皇が天皇にかわって政治をすること）の中心舞台となりました。白河は現在の左京区岡崎一帯で、六勝寺を始めとする寺々や御所などが造られていました。洛東は現在の東山区東大路七条付近で、法住寺殿などの御所や寺院が造られていました。このように都を離れた場所に院の御所と寺々が造られたのは、院政の特徴といえます。これらの寺々の建物の中でもひと

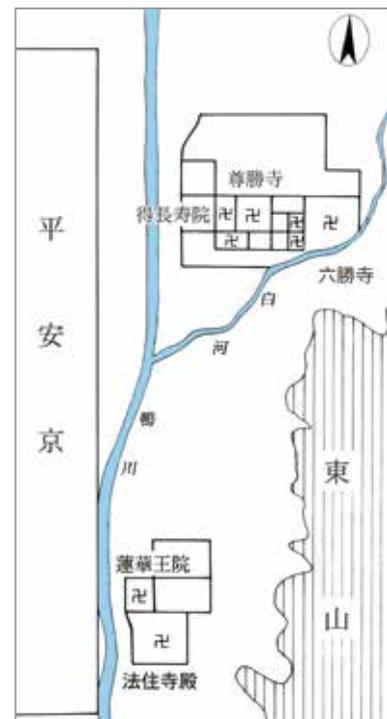
きわ名高いのは、三十三間堂です。

に面した、蓮華王院の本堂を思い浮かべます。この本堂は母屋の柱間数が三十三あるので三十三間堂と呼ばれています。ところで、平安時代後期には蓮華王院のほか、尊勝寺と得長寿院の合わせて三つの三十三間堂があった事が知られています。

三つのうち、最初に建てられたのは尊勝寺の三十三間堂です。尊勝寺は法勝寺や最勝寺などとともに、名前に「勝」のつく寺で、合わせて六勝寺と総称されていました。尊勝寺は法勝寺に次いで造られ、二町（240 m）四方の広い境内を持っていました。この境内の西側に、金堂が建てられたときから少し遅れ、長治二年（1105）に

高階為家によって阿弥陀堂が造られました。この阿弥陀堂は文献によれば「三十三間建物」と書かれており、丈六の無量寿仏を九体並べ、その脇侍に観音・勢至菩薩や四天王像を安置していたとされています。この建物は、その後、元暦二年（1185）七月九日に京都をおそった大地震で倒壊してしまいました。

六勝寺域ではこれまでに数多くの発掘調査を行っており、京都会館の西側では1977年から89年までの5回の調査で、この阿弥陀堂と推定される南北方向に長い建物の跡を発見しています。発見した建物は、母屋の東西の柱間数が二間（9.2 m）で、その廻りに一間



三十三間堂の位置

ずつひさし まごびさしの庇と孫庇の付く規模の大きいものです。東西の規模は今の蓮華王院の三十三間堂とほぼ同じですが、現在のところ北側十二間分を確認しているだけなので、はたして本当に三十三間堂であるのかは、今後の調査成果を待たねばなりません。この建物は、建物範囲より広く地下を1m程掘り込んで、土と砂を入れて突き固め、大変しっかりした基礎をつくっています。そうして礎石の位置には径1.5～2mの穴を掘り、中に大きな石をドーナツ状に組み、その上に礎石を据えています(表写真)。

次の得長寿院の三十三間堂は、長承元年(1132)に備前守平忠盛(清盛の父)が鳥羽上皇のために建てたものです。平忠盛はその功績により但馬国の国守となり、地下ちげ人から昇殿を許される上級官人となりました。このことがきっかけで、平家一門は中央政界へ進出し、権勢を誇るようになるのですが、このことは『平家物語』などでよく知られています。

得長寿院は尊勝寺の西に位置し、中心に三十三間堂がありました。堂内の中央には丈六の十一面観音菩薩、その左右に等身の聖観音菩薩各五百体を安置し、さらにその内に千体の小仏を納めたとされています。ところがこの堂は、建てられてからわずか17年足らずで西側に傾き始めました。修理方法をめぐって、様々な意見が交わされましたが、元暦二年の大地震で尊勝寺などと共に崩壊してしまい、以後、再建されませんでした。なお地震の後、わずかに残った仏像



蓮華王院の三十三間堂

は、蓮華王院の三十三間堂に移されたとも伝えられています。得長寿院があったと推定されている地域では何度か調査を行っていますが、確実な遺構はまだ発見されていません。

蓮華王院の三十三間堂は一番最後に造られました。蓮華王院は後白河上皇ゆかりの法住寺殿南殿の中にあります。三十三間堂は平清盛が忠盛の建てた得長寿院の形式を受け継いで、長寛二年(1164)に建てたものです。清盛はこの功績により、備前守に任命されています。建物は母屋が三十三間ですが、この周囲に一間の庇間が付き、全体で三十五間(長さ120m以上)となります。堂内には千体の観音菩薩が安置されていました。この建物は建長元年(1249)に、大火事で焼けてしまいましたが、その後ただちに堂や仏像の復興が始められ、文永三年(1266)に再建されました。これが現在の本堂です。堂内の中央部三間に丈六の千手観音菩薩像、左右それぞれ十五

間には十段の階段をつくり、五百体の千手観音菩薩像を安置しています。建物の規模は、修理調査によって、創建当初のものと大差ないと考えられています。

これら三つの三十三間堂はどれも長大なもので、法勝寺の八角九重の塔(高さ80m以上)と共に、世界でも類を見ない建物であり、まさに院政の権力を誇るためのモニュメントといえましょう。

また、三十三間堂を含め寺院や御所の建物は、いずれも平氏などの受領層(中・下級の貴族)の経済的な支えによって建てられたものです。彼らはこのような事業によって国司の地位が与えられるなどの見返りがあり、地方にあって財力を蓄え、次第に勢力を伸ばし、また、院の近臣などとなって中央政界でもさかんに活躍しました。そうした点から考えてみれば、これらの建物は極めて政治的なものであり、蓮華王院の三十三間堂は、その院政文化唯一最後の遺産といえます。